

ジュリアン・グリーンの留学時代

井上三朗

目次

- 一 はじめに
- 二 孤独
- 三 肉体の苦悩
- 四 マークとの出会い
- 五 愛と欲望との分離
- 六 同性愛者としての苦悩
- 七 マークへの愛の進展
- 八 おわりに——作家の誕生——

ジュリアン・グリーンの生涯については、以前、「ジュリアン・グリーンの出発」^①と題した論考のなかで、自伝第一巻『夜明け前の出発』（一九六三）に焦点を合わせて、母親の死までの子ども時代を明らかにしたことがあった。神への信仰が幼児期から培われたこと、純粹志向を有するために、二元論的な世界観が形成されたこと、アメリカ国籍と南部意識と純粹志向とが作用して、孤独意識が早くから培養されたこと、また、美（の発見）をとおして、目に見えるものの誘惑をうけたこと——この四点を指摘し、そして母親の他界がグリーンにとって、失樂園を意味することを論述した。

また私は、「ジュリアン・グリーンの思春期」^②という表題の論文を作成し、『夜明け前の出発』と自伝第二巻『開かれた千の道』（一九六四）に依拠しながら、母親の死去ののち、ヴァージニア大学留学のためにアメリカに出発するまでの、グリーンの思春期を概観した。カトリシスムへの改宗、さまざまな肉体的苦悩、へ大いなる拒絶を分析しつつ、思春期のグリーンがわざわざ言えば、神の国にあこがれつつも、地上の国への道を歩んでいるさまを見た。

本稿では、この二つの論考の続篇をなすものとして、グリーンの留学時代を取り上げたい。彼のヴァージニア大学留学の時期は、一九一九年秋から、一九二二年七月までである。この時期は自伝第三巻『遙かな土地』（一九六六）であつかわれているので、この自伝を主な検討の対象とする。

グリーンの留学時代は、マークとの出会い（愛）の体験に集約される。以下において、まず、この出会いに先立つ、グリーンの孤独と肉体的苦悩を一瞥し、次にマークとの出会いの場面を吟味する。それからグリーンにおける愛と欲望との分離と、彼の同性愛者としての苦悩とを指摘し、マークとの愛の顛末をたどる。さいごに、マークへの愛の体験がおよぼした、グリーンの文学への影響について考察したい。

二 孤独

グリーンは一九一九年の九月、母方の叔父ウォルター・ハートリッジの招きを受けて、アメリカに渡る。そしてヴァージニア大学に入学をし、下宿生活を始める。叔父が探してくれた下宿に身を落ちつけた頃、学生たちが大学界隈の大通りにぎわっていたのを思い出しながら、グリーンは自伝『遙かな土地』のなかで、次のように書いている。

「私は、とても幸せそうに見えるあの青年たちのようであった。だが、彼らのうちの誰にもほほえみながら手を差し出し、何なりと月並みな言葉を口にするという、かくも単純な行爲をすることに、私の中の何かさがさからつていた。もし何なりと言っておれば、自分が閉じこめられていた魔法の輪から出られたことだろう。しかし最初の一步を踏み出すことが私にはできなかった。見知らぬ人に話しかけることができなかった」(V、一〇五三頁)。

グリーンは、「自分が閉じこめられていた魔法の輪」に言及している。「魔法の輪」(circle magique)という言い方は、『夜明け前の出発』においても見られた。グリーンが他の人びとから切り離されて生きていた孤立の状況をうまく表現している。グリーンはいったいなぜ、孤立のなかで悩まなければならなかったのか。まず想定されるのは、性格の内気さである。この内気さが、学生たちに手を差し出し、話しかけるのをはばんでいると思われる。他者への恐怖が孤立をもたらしているのである。グリーンは自伝のなかで、「手短に言つて、私は人間たちが、とくに群れをなしているときこわかった。時として危険な状況で、兵士や移動野戦病院の看護兵たちとともに生きたことは、事態をならんら打開しなかった。やっぱり私はこわかった」(V、一〇五一頁)と内省している。ここでの「人間たち」への恐怖が性格の内気さに基づいていることは、言を俟たない。

しかしながら、留学時代のグリーンの孤立は、ただ単に性格の内気さに起因するだけではない。これとともに、グリーンがアメリカの土地で異邦人であったという事実が、彼の孤立に大いに関係している。たしかにアメリカ南部は、母親の故国

であるがゆえに、グリーンじしんの母国でもある。『遙かな土地』のなかで、南部の土地にはじめて身を置いたグリーンは、「私は突然、母の祖国、南部を目の前にしていた。(…) どれだけフランスに愛着を持つとも、私の中の或る部分は、私が今いる土地以外に起源をもたないのだ」(V、一〇四七頁)との感慨にひたっている。けれども、グリーンはアメリカの国にあつて、自分が異邦人であることを意識しないではいられない。船でニューヨークに着き、アメリカの土地への第一歩を踏み出したグリーンは、叔父と叔母に案内されて五番街を歩き、摩天楼を見物したときのことを、こう回想している。

「まったく、『新世界』とはこれなのだ。早くも私は『旧世界』のことを恋しく思つていた。率直に言えば、私はアメリカが好きではなかった」(『遙かな土地』V、一〇四五頁)。

このようにアメリカに足を踏み入れたとき、グリーンはアメリカを「新世界」と見なし、「旧世界」であるヨーロッパをなつかしんでいる。ここでは、自分の母国にやつてきたことによるこびは感じられない。長年フランスに住み慣れたグリーンの中の血の中には、ヨーロッパの風土が滲み込んでおり、もともとアメリカ人でありながらも、あるいはアメリカ国籍を有しながらも、アメリカの風土に溶け込むことができなかつた。グリーンはアメリカ人のことを、心の中で「野蛮人・未開人(les Barbares)」(V、一〇四六頁)と呼び、差別・軽蔑している。自伝『遙かな土地』では、「アメリカ人とは、簡単に言えば、『野蛮人』であつた」(V、一〇五六頁)という文も読める。グリーンはアメリカ人であるにもかかわらず、アメリカ人を同胞の人だと思えなかつた。長らくパリに滞在することで、フランス人になつていたのである。

風土の違いとともに、話される言語の違いもまた、グリーンの異邦人意識に関与する。グリーンはこれまでパリでフランス語を話してきた。家庭内では英語が使用されたものの、フランス語はグリーンにとつては、母語の地位を獲得するに至つていた。⁽⁵⁾しかしアメリカにやつてくることで、グリーンは否応なく英語を話すことを強いられる。『遙かな土地』のなかで、アメリカで学生生活を開始したグリーンは、「遅かれ早かれ、私は学生や先生たちと英語で話さなければならなくなるのだ」(V、一〇五〇頁)と遺憾の意を込めて黙考している。グリーンにとって、英語は親しい言語であるとはいへ、やはり外国

語の一つでしかない。英語で意思の疎通をはからなければならぬことによつて、グリーンは異邦人の意識をつのらせることになる。

話される言語の違いと同様に、宗教の違いをも視野に入れなければならぬ。周知のように、フランスはカトリックの国であり、アメリカはプロテスタントの信者が圧倒的に多い。霊的自伝『人間に必要な愛』（一九七八）のなかで、グリーンは留学当時のアメリカ南部の宗教について、「私のまわりのほとんどすべての人びとは、（…）プロテスタントであった。私たちカトリックの信者は、ほんのひと握りの存在にすぎなかつた」（Ⅵ、九二八頁）と伝えている。そして長老派教会や米國監督派教会が「贅を尽くした」もので、「天に勝ち誇つたような大音響の笏を投げ放つていた」のにたいし、カトリックの教会は「きわめて小さく」、「木造り」の建物の上の「とてもつつましい鐘」だけが「控え目に鳴つていた」ことを顧みている（Ⅵ、九二八頁）。『人間に必要な愛』において、グリーンは「カルヴァン派の異端」（Ⅵ、九三〇頁）について語っている。カトリックの信仰をもつグリーンの目には、プロテスタントの信者であるアメリカ人は異端者にうつつた。宗教の違いもまた、グリーンに異邦人意識をいだかせる要素となる。この異邦人意識が、グリーンを孤立または孤独の中におとされるのである。

グリーンは孤立ないし孤独をもたらすものとして、純粹志向が挙げられる。このことは、グリーンの子ども時代の孤独意識をしらべたとき、すでに指摘した（Ⅴ）事情は留学時代になつても変わらない。グリーンは『遙かな土地』のなかで、ヴァージニア大学に入学したばかりの頃に首をめぐらして、「私は自分が完全に純粹であるので、完全に一人ぼっちであり、完全に救われていると思つていた」（Ⅴ、一〇八〇頁）と言ひ切つてゐる。この文からは、選民意識と相俟つて、自己の純粹さを希求するがゆえに、自分が孤立してゐる、孤独であるとの認識が読みとれる。グリーンは純粹志向もまた、異邦人意識とともに、孤立と孤独をもたらしている。自らの孤立と孤独への意識は、それが高じれば、深刻な苦悩と化すことは、贅言を要しない。

留学時代のはじめの頃のグリーンの孤立もしくは孤独を見てきた。孤独意識はすでに幼年時代から芽生えていたが、アメリカの土地にひとり投げ出されることで、いつそう深化するのだといえよう。

三 肉体の苦惱

このように、グリーンは孤立した状況に置かれ、孤独意識をいだいていた。と同時に、グリーンは孤独のなかで肉体の苦しみにとらえられることになる。肉体的懊悩が母親の他界ののちいやましたこと、その懊悩を惹起するもの一つとして彫像があったことは、すでに述べた。留学時代にも彫像はグリーンを苦しめる。ヴァージニア大学構内にはキャベル・ホールという建物がある。この建物の正面玄関には、プラクシテレスの制作したヘルメスの複製像が立っている。幼児のバックスを抱いたこのヘルメスの彫像に、グリーンは魅せられる。『遙かな土地』のなかで、キャベル・ホールの地階でラテン語の補習授業をうけたあと、一階の正面玄関のヘルメス像の前に出たときのことを、グリーンは思い起こしている。

「この補習授業は、キャベル・ホールの地階でおこなわれていた。教室はほんのわずかな照明しかなされていなかった。一階の広い正面玄関にもどるために、私たちは二十ほどの段からなる階段をのぼるのだった。その階段の上のほうには、(…)石膏のヘルメス像が光を浴びて勝ち誇っていた。ところで、私は頭上にある、この《真つ白な体の輪郭》を、たとえ不意にでしかないとしても、見ないではいられなかった。というのも、私はまさしく見ないために、大抵の場合、目を伏せていたけれども、見ないことは私にとって、一つの試練であったからだ。見ることがもうひとつの試練であったように。どちらの試練のほうが自分を苦しめたかを答えることは困難であっただろう。ふたたび、六歳のとき、「凶報の使者たち」を前にした際と同じように、私は、さっぱり訳のわからない欲望の餌食になるのを感じた」(V、一〇

さいごに、「私は（…）欲望の餌食になるのを感じた」と告白しているように、グリーンはヘルメス像を前にして、肉体的な欲望に牛耳られている。裸身の彫像は、グリーンを肉なるものにいざなうものとしてある。幼い頃、また一九一九年、第二次バカロレアの試験を受けたあと、ルーヴル美術館で見た古代ギリシアの神々の彫像と同様に、そしてまた、一九一九年の九月、ナポリ国立美術館で鑑賞したナルシス像と同じように、このヘルメス像もまた、裸身であるがゆえに、グリーンを肉体的に魅惑する。「見ないこと」が「二つの試練」になるのは、ヘルメス像が欲望の対象であり、欲望を断ち切ることの苦しみをひきおこすからにほかならない。「見ること」が「もうひとつの試練」となるのは、純粹志向をもつグリーンにおいては、見ることよって増幅する欲望とのたたかいが、必然的に招来されるからである。見ることへの欲求と見まいとする決意との交錯をとおして、肉なるものへの執着と反撥が見てとれる。この二律背反的な反応がグリーンの肉体的苦悩を形成している。

また『遙かな土地』では、一九二二年冬の頃の思い出として、サヴァナの美術館で、オリンポスの神々の彫像を前にして、「理性をうしなつたこと、「胸をときめかせ」、「顔をほてらせ」ながら、つまり興奮しながらその彫像を見て、「奇妙な幸福」すなわち肉体的な幸福を味わったことが報告されている（Ⅴ、一一三三頁）。裸身の彫像は、グリーンをつねに肉体的に誘惑するものとしてあつたのである。

さらにグリーンは、彫像のほかに、美しい顔をした人間を見て苦しまねばならなかった。『遙かな土地』において、次のような文章を見いだすことができる。

「どうして人の顔を見るだけで、このように苦しむのだろう。何度も何度も眺め、何度も何度も苦しむことができる。だが、この苦しみのなかには、心を荒廃させる、残酷な幸福が入り混じっているのだ。私はどう考えてよいのかわからなかった。私は死にたかった」（Ⅴ、一〇六三頁）。

グリーンはいったいなぜ、人の顔を見て苦しんでいたのであろうか。その理由は、美しい顔をした人とまじわりを持ちた

いと思つても、その人に接近できないという点に存するだろう。グリーンの苦しみはまず孤独の苦しみである。しかしそれはまた肉体の苦しみでもある。人の顔はグリーンに欲望をそそり、しかも彼はこの欲望とたたかうがゆえに、苦悩が生じるのだ。「心を荒廃させる残酷な幸福」とは欲望とたたかうがゆえに、欲望がいくらか充足されたことによるものだと思われる。罪悪感をいだきながらも、見ることで、肉体的なよろこびが得られたことに源を発するのである。

グリーンは『遙かな土地』のなかで、シャーロットヴィルの近くに住む、従弟ビルの美しい顔のことを追憶している。

「(…)私はできる限り彼(ビル)を見ないようにしていたと言わざるを得ない。実際、彼はあまりにも魅力的な顔をしていたので、気詰まりな思いをしないではいられなかった。この気詰まりな思いは、従弟を見ることによつて目をそらすことができなくなるのではないかと私が恐れていたことに起因していた。深い意味はわからなかったが、美が私におよぼす一種の魅惑から自分を引き離すために、猛烈な努力が必要だった」(V、一〇六九頁)。

グリーンは従弟ビルの顔を見ないように力を尽くしている。なぜなら、ビルの顔は「あまりにも魅力的」で、いったん見れば、「目をそらすことができなくなるのではないか」と危惧するからである。グリーンは従弟の顔をとおして、美の魅惑を感じ取っている。美とはグリーンを肉なるものにいざない、肉なるものにとりこにする罠である。さいこの、「美が私におよぼす一種の魅惑から自分を引き離すために、猛烈な努力が必要だった」という言い方からは、ビルの顔の美しさを前にして、換言すれば、美(肉なるもの)の魅惑を前にして、見ることへの欲求とたたかい、苦悶するグリーンの様子が浮かび上がってくる。

グリーンは人間の顔をとおして美に魅せられて生きていた学生時代を、次のように想起している。

「美が私に引き起こす恐怖は、美が私におよぼす魅惑の一部分をなしていた。だがこの恐怖は不可解なままであった。

(…)美しい顔はもはや数え切れなかった。そして顔が私のほうを振り向けば、私はかならず、自分が奇妙にも罪人だと感じるのであった。一言にしていえば、美は私を完全にほろぼしてしまふのであった」(『遙かな土地』V、一一〇二)

美の魅惑を前にして、グリーンは「恐怖」(effroi)を感じ、罪悪感にかられている。この有罪性への意識は、グリーンが同性の人間から美を看取することとかかわっている。だが同時に、肉体的な欲望にとらえられることにも胚胎している。というのも、欲望をいだくことは、明らかに罪を構成するからだ。グリーンが味わう「恐怖」も、欲望に見舞われることへの恐れにほかならない。さいこの、「美は私を完全にほろぼしてしまふのであった」という文は、グリーンが美を前にして、罪意識にさいなまれながらも、肉体的な欲望に襲われ、煩悶するありさまをかいま見せている。

四 マークとの出会い

このように、留学時代、グリーンは孤独のなかで、肉体的苦悩にさいなまれながら生きていた。そして孤独と肉体の苦しみをいつそう深刻にする事件が起こることになる。マークと呼ばれる学生との出会いがそれである。この出会いは、グリーンがアメリカに到着してから、三、四カ月後の一九二〇年の初めになされた。グリーンはヴァージニア大学構内で、マークを偶然見かけることによって、突然、愛の情熱にとらえられる。『遙かな土地』のなかで追懐されている、マークとの最初の出会いの場面を読むことにしよう。

「私は一人の若い学生が自分のほうへ走ってくるのを見た。その学生の顔は、かつてこの世でそのような顔を一度も見ることがないと思つたほどに見えた。寒さのためにあざやかになった彼の蔷薇色の頬は、真つ黒な目にたいして格別のみずみずしさをもたっていた。私には、彼の鼻が低く、唇がとも赤く、その顔だちのすべてが健康と幸福とを語っていることに気づく余裕があった。私はすぐさまその顔だちに夢中になった。(…)

(…)

突然、私からは自由が奪われた。三秒か四秒しか見なかった誰かのせいでは、私は奴隷になっていた。自分の部屋にもどるのに苦労しなければならなかった。そしてベッドに、壁と向きあつて身を横たえた。私にはよくわかつた、愛とは不幸であることが」(V、一〇九七頁)。

グリーンがむこうからやつてきた学生マークにたいして、突然の情熱をいだくことは、前半の段落のさいごの、「私はすぐさまその顔だちに夢中になつた」という文からわかる。グリーンは自分の前に出現した一人の〈他者〉に不意に心を奪われる。グリーンはこれまで、一度だけ〈他者〉の存在を啓示されたことがあつた。一九一七年の七月、移動野戦病院車の運転手としてアルゴンヌの前線に出発しようとしていた頃、グリーンに愛の情熱を感じ、グリーンを喫茶店に誘ひ、ほとんど言葉をかすことなく去つていった一人の青年をとおして、〈他者〉の存在を知らされた。しかし今度は自分のほうが愛の情熱を覚えることによつて、決定的に〈他者〉の存在を知る。しかもその愛の情熱は選択の余地のないものであることに注意しなければならぬ。「突然、私からは自由が奪われた」とか、「私は奴隷になつていた」とかいつた表現からわかるように、愛は選択の結果としてあるのではなく、自分の意志とはまったくかわりのないところで、どうしようもないかたちで生じている。フランス語で「一目惚れ」のことを、「雷の一撃」(coup de foudre)と言ふが、グリーンはまさしく「雷の一撃」に打たれるように、愛の情熱に襲われる。したがつて、この愛は不可避的なもの、宿命的なものといえる。だからこそ、グリーンは、さいごに書いているように、「愛とは不幸である」と認識するのである。

ここで、グリーンの創作作品において、愛がしばしば不可避的・宿命的なかたちをとつて注意を喚起しておきたい。グリーンの作中人物は一人の〈他者〉の出現によつて、たちどころに愛の情熱にとりつかれる。『クリステイーヌ』(一九二四年作成)のなかで、ジャンは別荘にやつてきた少女クリステイーヌを一目見るや否や、心を奪われ、恋のとりこになつてゐる。『アドリエヌヌ・ムジュラ』(一九二七)のヒロインは散歩中、路上で馬車に乗つたモルクール医師をほんの一瞬みとめただけで、恋におちいる。『モイラ』(一九五〇)において、プレローは下宿屋の食堂でジョゼフをちらつと見た

だけで、不可能な愛の情熱に支配される。劇作『南部』（一九五三）のイアンや、『悪人』（一九五五、完全版一九七三）のエドウィー・ジュも、瞬間的な出会いによって、愛の情熱に見舞われ、翻弄される。これらの人物たちの愛は、個人の選択とか意志を越えたもの、つまり不可避的・運命的なものであり、人物たちは自らの情熱をどうしようもないかたちで、もしくは制禦することができないかたちで生きている。このように、グリーンンの作品において、愛あるいは出会いは、宿命的な様相を呈している。この事実のなかに、作者グリーンンの、マークとの出会いの体験の反映を見ることが出来る。

マークとの出会いに話をもどそう。この出会いによって芽生えた愛は、グリーンンが自覚的に生きた最初の愛であった。それは熱烈な初恋であり、グリーンンの人生のなかで決定的な体験となった。けれどもマークへの愛の体験が重要なのは、この愛が熱烈であり、グリーンンがマークをとおして「他者」の存在を決定的に知るからだけではない。と同時に、それが同性愛の体験であり、通常の人とはちがった性向を有する人間の愛であるがゆえに不可能な愛の体験となるという点においても重大なのである。自伝のなかの、マークとの最初の出会いの場面のつづきを引用することにしよう。

「読書すること、勉強すること、祈ること、そうしたことはすべてもはや問題ではなかった。《ぼくは彼を愛している》と私は思った、《死ななければならぬまい》。ところでなぜ死ななければならぬのか。現代の世界では、別の若い男に恋をする若者のためには場所がないからだ。誰も理解してくれないだろう。皆は私を氣遣いだと思ふことだろう。それに、曰く言いがたい大胆さをもつて秘密を打ち明けたとしても、まず第一にあの蔷薇色の頬をした青年が、私を氣遣いだと思ふことだろう。今や、私は秘密をもつた男となった。（…）今後は恥ずべき行為を隠すように、何か隠すべきこともつのだ。このことは自分を少しも罪ある者とは思っていないに、なおさらつらいことであつた。この愛のなかに、肉体的なものは何もなかった。おそらく、こうしたことすべての中でもっとも独異な点はそこにあつた。私の考えでは、愛とは純粹なものでしかありえなかつた。欲望はまったくちがつていた。欲望は罪であつた」（V、一〇九

七—一〇九八頁）。

グリーンはこのテキストにおいて、homosexualité (同性愛) とか、homosexuel (同性愛の、同性愛者) とかいった語を使っていない。のみならず、グリーンはどの作品においても、これらの単語を用いない。それらの単語はグリーンの語彙からは排除されている。けれどもグリーンがマークと邂逅するにおよんで、自分が同性愛者であること、ふつうの人間とはちがった性向の持ち主であることを自覚するに至ったことは、一読して明らかである。このことは、たとえばはじめのほうで、「現代の世界では、別の若い男に恋をする若者のためには場所がない」と考えていること、そう考えるがゆえに、「死ななければなるまい」といったように死の想念にとらえられていることからわかる。もつとも、グリーンの同性愛の性向は、マークとの出会い以前にも察知することができた。というのも、グリーンが幼い頃から、人間の肉体や顔の美しさに感動したのには、主として男性のほうであったからである。またグリーンじしん、大学でのラテン語の講義中に、古代ギリシア・ローマの愛の実状、先生が「古代の恥」(La honte de l'antiquité) と呼ぶ少年愛 (boy-love) の実状を聞き知って、自分も同じ情念をもっているのではないかと疑ったりもしている(『遙かな土地』V、一〇七四頁)。とはいえ、グリーンは、恋愛と結婚とは男女間でしか成立しないと思いきや、ところがマークへの愛を自覚するにおよんで、グリーンは性愛の領域において、自分が通常の間人とは完全にことなっていることを思い知る。「誰も理解してくれないだろう。皆は私を気遣いだと思うことだろう」との推測はそのことを端的に示している。

グリーンが自らの愛を、誰からも理解されないものと思考するがゆえに、当然のことながら、その愛は秘密となる。グリーンは、「今や、私は秘密をもった男となった。(…) 今後は恥ずべき行為を隠すように、何か隠すべきことをもつのだ」と言っている。事実、こののちグリーンは「恥ずべき行為を隠すように」、マークへの愛を、世間にたいしてのみならず、マークにたいしても隠して生きることになる。グリーンの愛は、秘密と沈黙のなかで生きられる、告白されない愛、対象から離れ、対象と交流をもつことのない不可能な愛となる。

また引用文のなかで、「この愛のなかには、肉体的なものは何もなかった。(…) 私の考えでは、愛は純粹なものでしかあ

りえなかつた。欲望はまったくちがつていた。欲望は罪であつた」と語られている点にも注目する必要がある。マークへの愛が肉体的なものではなく、欲望の混じりけのない「純粹な」ものであつた、とグリーンは顧みている。グリーンはこののちも、マークへの愛を、欲望から浄化したプラトニックなものとして生きようとする。なぜなら、グリーンも言うように、「欲望」は「罪」であり、宗教的に容認しえないからだ。男女間の愛の欲望は、結婚ののち、生殖という目的のために正当化される。これにたいして、同性愛の欲望は生殖につながらないため、あくまで罪としてとどまる。マークへの愛は同性愛であるがゆえに、欲望を排除したものにならざるをえない。グリーンは自伝のなかで、「ローマ人への手紙」第一章第二十七節の、「男もまた同じように女との自然の關係を捨てて、互にその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行の当然の報いを、身に受けたのである」という文を読んだときのことを想起しつつ、「私はといえば、私は聖書のその頁の上に手を置いて、罪ある者であると感ずることなく、マークのことを考えることができた。私の愛は不可能な愛であつた。しかしそれでもやはり愛であり、汚れの見えない愛であつた」と述懐している（『遙かな土地』Ⅴ、一一一五頁）。グリーンが聖書を読みながら、しかも同性愛の欲望を断罪した箇所を目をとめながら、マークのことを想えるのは、マークへの愛がプラトニックなものであるからにほかならない。グリーンは愛を欲望から浄化することによつて、愛と信仰との両立をはかつたのだと判断できる。

五 愛と欲望との分離

ところで、ジャン・セモリュエは、グリーンの同性愛に論及しつつ、「同性愛はしばしば魂への愛、やさしさの中で実現される。しかし一般的にいつて、他の愛の形態よりもはるかに、快樂と感情とを分離する」と考究している。ジャン・セモリュエは、同性愛が肉体的な愛ではなく、「魂への愛」になる傾向にあること、また、「快樂」と「感情」とを、言いかえれ

ば、欲望と愛とを分離しがちなことを指摘している。この指摘はグリーンの場合には全面的に当てはまる。すでに見たように、グリーンはマークへの愛を欲望から切り離し、純粹なものにしようとする。しかし肉体的な欲望は満たされないものとしてこのころ。そこでグリーンはマークをプラトニックな愛で愛する一方で、彫像や、マーク以外の若者たちの美しい顔や肉体を眺めることで、欲望をわずかながらも発散させていた。グリーンは『遙かな土地』のなかで、こうしたためている。

「私の心の中で、愛の明確な概念が形成されつつあった。一方で、私は自分をマークに結びつけるような理想的な愛を見いだしていた。(…)他方、肉に結びつくような全く動物的な愛があると私は考えていた。その愛は不純であった。しかし二つとも、純粹な愛であれ、不純な愛であれ、私を世間から孤立させていた。というのも、私は自分を現代文明のなかにさまよいこんだ古代の人間だと思っていたからだ」(V、一一四九頁)。

グリーンは、同性愛者としての自己の孤立を確認するとともに、愛を二つに分類している。「理想的な愛(純粹な愛)」と「全く動物的な愛(不純な愛)」とにである。前者は欲望を除去したプラトニックな愛であり、後者はもっぱら相手に欲望をいなく肉体的な愛である。ここから、グリーンの内心において、愛と欲望とが分離していることがたしかめられる。ここで、マークとの出会いののちの、グリーンの肉体的な愛、あるいは欲望の体験を一瞥しておこう。グリーンはマークをプラトニックな愛で愛する一方で、ニコルズという学生にたいして、肉体的な愛、すなわち欲望を覚えている。ニコルズはスペイン語の授業で一緒だった。グリーンは『遙かな土地』のなかで、この学生のことを思い出している。

「なるほど私は授業を変えることはできた。が、そうはしなかった。私は苦しむことのほうを、こんなふうに苦しむことのほうを好んだ。というのも、もうニコルズに会わなくなれば、このち、はるかにもつとはげしい苦しみになったであろうからだ。真の問題はそこにあった。その顔を見ることはよろこびであった。私の心の中ではなく、肉において、私を荒廃させるよろこびであった。この責苦をのがれることは、幸福を、悪魔的など書くことをためらわない幸福を断念することであった。まさしく畏が張られていた。私はマークを、一切の官能的な思いを排除する愛で愛していた。二

コルズについては、同じようにはいかなかった」(二一四六頁)。

グリーンはニコルズの顔を見ることが、「心の中ではなく、肉において」自分を「荒廃させるよろこび」であり、その「よろこび」が「責苦」であるとしても、「悪魔的」な「幸福」であったと打ち明けている。グリーンはこの「幸福」を「断念する」ことができない。ニコルズが出席するスペイン語の授業を受けつづける。またグリーンは、マークへの愛が「一切の官能的な思いを排除する」愛であったのにたいして、「ニコルズについては、同じようにはいかなかった」と言明している。ニコルズへの愛は肉体的なものであり、「動物的」で「不純な」ものであったと判定できる。

グリーンはまた、美しい若者との瞬間的な出会いによって、肉体的な欲望にとらえられている。一九二〇年の夏、サヴァナの伯父のところまで休暇をすごしていた頃の思い出として、ある夜、港から遠くない並木道を散歩中、一人の水兵に遭遇した体験が、『遙かな土地』のなかで喚起されている。

「そのとき、暗闇から、白い服を着た若者が出てきて、小声で歌を口ずさみながら、私のそばを通りすぎた。これまでの私は、夏服を着た水兵を見たことはまだ一度もなかった。私の茫然自失した顔つきと、私が急に動かなくなったのを目のあたりにして、水兵は少しからかうようなやさしさでほほえみ、孤独な散歩をゆつくりとつづけた。いちばん近くの街灯に照らされた空間を通り抜けたとき、彼は銀の彫像のように思われた。というのも、非の打ちどころのない制服は、新たな裸体となるほどまでに、体の線を正確に浮かび上がらせていたからだ。そのため私は、よろこびに入り混じった恐怖をいだいた。そのよろこびは筆舌につくせない。ふたたび私は「凶報の使者たち」の前にいるのだった。だが今回は、もはや幼年時代の暗闇のなかで見ているのではなかった。人間の美は、電撃的な光のなかで私の前に現われたのだった」(Ⅴ、一一三三頁)。

ここで語られている水兵との出会いは、人間の肉体美にふれた体験である。このことは、水兵が「銀の彫像」になぞらえられていること、グリーンが幼い頃に見た、ルコント・デュ・ヌイの「凶報の使者たち」の中の人物に擬せられていること

から歴然としている。グリーンは、「人間の美は、電撃的な光のなかで私の前に現われた」とも認めている。水兵は美を体現する存在である。そしてグリーンは、「非の打ちどころのない制服は、新たな裸体となるほどまでに、体の線を正確に浮かび上がらせていた」と思い浮かべているように、水兵の肉体を感じ取り、「よろこびに入り混じった恐怖」をいだいている。この「恐怖」は、純粹志向を有するがゆえの、肉なるものを前にしてのおのきであり、「筆舌につくせない」と形容される「よろこび」は、欲望が刺戟されたこと、欲望が一定程度充足されたことと関連する。それゆえ、水兵との邂逅は肉体的欲望の体験である。

またグリーンは人間の肉体美を表現した彫像を眺めることによつて、欲望にとらえられることもあった。一九二一年の冬、サヴァナの美術館で、オリンポスの神々を鑑賞しながら、「奇妙な幸福」、つまり肉体的な幸福を味わつたことは、先述したとおりである。このように、グリーンはマークとの出会い以後、マークをプラトニックな愛で愛する一方で、肉体的な愛、あるいは欲望にいざなわれている。繰り返して言うように、グリーンにおいては、愛と欲望との分離が識別されるのである。

六 同性愛者としての苦惱

プラトニックな愛であれ、肉体的な愛（欲望）であれ、この体験が孤独の体験ともなることは疑いを容れない。なぜならグリーンにおける愛と欲望は、どちらも同性の若者に向けられているからだ。自分のなかに二つの愛があることを確認した先の引用文においては、「しかし二つとも、純粹な愛であれ、不純な愛であれ、私を世間から孤立させていた。というのも、私は自分を現代文明のなかにさまよいこんだ古代の人間だと思つていたからだ」という記述が見られた。「現代文明のなかにさまよいこんだ古代の人間」と自己規定するグリーンは、同性の人への愛と欲望を感じることで孤立し、一人であることの苦しみにさいなまれる。もつとも、グリーンは一九二一年の四月頃、ハヴロック・エリスの本を読むことで、同性愛が古

代ギリシア・ローマにのみ見られる現象ではなく、現代でも存在する現象であることを知る。この本を読んだあと、グリーンは次のような感慨にひたっている。

「私は別の時代からやってきた怪物ではなかった。男性の美に対する情熱は、おそらく今日でも、多くの若者の胸を高鳴らせているのだろう。数分のうちに、世界全体は様相を変えた。私の牢獄の壁は、風に吹かれる霧のように消えうせた。そういうわけで、私はもはや一人ではないのだ。」（『遙かな土地』V、一一九頁）。

グリーンは、同性愛が古代に特有の現象ではないことを知って、「私はもはや一人ではないのだ」と安堵している。とはいえ、同性愛が現代にも見られるからといって、事態は打開されるわけではない。同性愛者はグリーン一人ではないとしても、少数者であることに変わりはないし、同性愛は依然として性の倒錯現象としてあつかわれているからだ。マークとの出会以後、グリーンの孤独の苦悩は深化していったとみませよう。というのも、マークへの愛は、同性愛であるがゆえに、秘密と沈黙のなかで生きられたからであり、対象と交流をもたない愛は孤独の苦悩を強めるエネルギーにしかならないからだ。もともと愛は孤独の対立項としてあり、人は愛することによって、孤独から脱却しようとする。しかし対象から遠く離れたところで生きられる愛は、孤独を深めることしかできない。また肉体の苦悩も、マークとの邂逅ののち、深刻になるように思われる。はげしい愛の情熱をかかえるとき、いくらプラトニックな愛を貫こうとしても、別の言葉でいえば、たとえば愛を欲望から浄化しようとしても、人は欲望に圧倒される。愛の欲望とは、愛の対象とともにありたい、愛の対象を所有したいという願いであり、人は愛するかぎり、この願いを断ち切ることはできないからだ。プラトニックな愛で愛するとは、永遠の欲望で自らを責めさいなむことではないだろうか。げんにグリーンもまた、マークへの愛を生きる過程で、マークへの肉体的欲望にとらえられている。『遙かな土地』の終わり近くで、グリーンはマークへの思いを、こう書き綴っている。

「私はマークのことを、もはや天使のように考えていなかった。彼が泳ぐとき、ほんとうにとても美しいにちがいない。私は、水に濡れた彼の体を想像するのだった。」（二二四頁）。

グリーンは、マークが泳いでいるところを夢想し、「水に濡れた彼の体を想像」している。グリーンはマークの肉体を思い浮かべている。これは、マークへの肉体的欲望に揺り動かされていることを示唆する。けれども大事な点は、このような個々の具体的な事実ではなく、永遠の欲望をもたらすという、プラトニックな愛の普遍的な真実である。もう一度説明すれば、愛とは対象との合一を願う欲求でもあるがゆえに、いかに愛を欲望から浄化しようとしても、欲望を断ち切ることはできない。むしろ、欲望を愛から排除しようとすることによって、欲望の成就を拒否することによって、かえって逆に、欲望にとりつかれかねない。なるほど、マークへの愛は、ニコルズへの愛とはちがって、「動物的」(肉体的)な愛ではない。だがマークをプラトニックな愛で愛そうとすることによって、いつそう深刻な肉体的懊悩におちいったであろうことは、察するに難くはない。グリーンはヴァージニア大学留學時代を振り返って、「もし私が娘たちを愛しておれば、人生のすべてがどんなにかたやすかつたことであろうに！」(『遙かな土地』V、一二一〇頁)と総括している。この文では、同性愛の性向を有することでの、生きることの困難さが披瀝されている。マークへの欲望と同様に、グリーンが「動物的な愛」と呼ぶ愛の欲望もた、同性愛の欲望が問題なので、もちろん十全には満たされない。マークとの出会い以後、肉体と孤独の苦しみはさらに深まっていったのである。

七 マークへの愛の進展

マークとの出会い以後の愛の進展をたどっておきたい。前述のように、一九二〇年の初め、グリーンはヴァージニア大学構内でマークをはじめて見かけ、愛の情熱にとらえられる。このとき、グリーンはマークの名も住所も知らなかった。けれども一九二〇年四月のある日、学生たちが住む東アーケード街をグリーンが歩いているとき、ドアのひとつが開けられ、一人の青年が出てきた。それは大学構内で見た青年だった。グリーンはひとことも言葉をかわすことなく、この青年とすれち

がう。だが青年が閉めたドアに、グリーンは三十四という番地とマークという名前を読みとる。こうしてグリーンは愛する人の名前と住所を知る。この日以降、グリーンは夜ごとマークの住んでいるあたりをうろつくようになる。グリーンは『遙かな土地』で、この頃のことを思い起こしている。

「いったい私は何を期待していたのだろうか？ それを言うことはできなかつたであろう。もしマークのドアが開いたら、私はすぐさま姿を消したであろう。少なくともそのことだけは確信していた。しかし私は、彼が息をしている部屋のそばに居ることに、身をさいなむようなよろこびを感じていた。疑いもなく、私は大いに苦しんでいた。けれども私には、この苦しみが必要だつた。小声で最愛の人の名を口にするのだった。するとそのようなとき、頬骨のところにある薔薇色の頬に、私の唇がふれるような気がした。こうした妄想に頭がぼうっとした。ある夜、三十四番地のドアの真正面の草の上で、腹ばいに寝そべつて、地面に顔をくつつけた」(V、一一〇七頁)。

この一節では、マークにたいするグリーンの熱い思いが語られている。「疑いもなく、私は大いに苦しんでいた。けれども私には、この苦しみが必要だつた」という言辭は、グリーンが苦しみながらも、能動的・積極的にマークへの愛を生きようとする姿勢を有していたことがわかる。また、「もしマークのドアが開いたら、私はすぐさま姿を消したであろう」という三番目の文は、グリーンの愛が対象に接近・告白しえない愛であつたことを示している。グリーンの愛がこのようなかたちをとるのは、性格の内気さにも原因するけれども、彼の愛が何よりもまず、同性愛であり、隠さねばならないものであつたからである。とはいえ、グリーンは「小声で最愛の人の名を口に」している。自分の愛が秘密と沈黙のなかで生きなければならぬものであるとしても、否、そのようなものであるからこそ、なおさら愛する相手に接近したい気持ちでグリーンは有していたのであろう。また愛する人の名前をささやくことによつて、自分の「唇」が愛する人の「薔薇色の頬」に「ふれる」ような妄想に、グリーンはとりつかれている。これは、グリーンが純粋な、あるいはプラトニックな愛でマークを愛そうとしながらも、肉体的な欲求にとらえられているからである。同様に、さいごに述べられているように、グリーン

がマークの部屋の「真正面の草の上で、腹ばいに寝そべって、地面に顔をくっつけ」るのも、彼の欲望に立脚している。この行為は性行為の代用と解釈することができる。マークへの愛は純粹であると同時に、官能的なものであったと認定できる。こののちも、マークへの愛は秘密でありつづける。マークじしんに愛を告白することはおろか、マークを愛していることを、ほかの誰にも知らせることはなかった。たとえば、一九二〇年の夏、休暇でサヴァナに行ったとき、グリーンは裁判官をしている従兄のトーマス・チャールトンと話をしている、マークへの愛を打ち明けることを思いつく。「あなたが大学のことを話されるので言いますが、私がマークという名前の学生に恋をしていることをわかってください」(「遙かな土地」V、一一二二頁)と告げる場面を思い描く。「この名前を言うだけで、私は解放されただろう」(V、一一二二頁)とグリーンは省察している。愛を秘密として生きることが、グリーンにとつては、苦しく、耐えがたい重荷だったことがわかる。けれども、「もしそうすれば、この裁判官の顔にどれほどの冷ややかな嫌悪の念を読みとることであろう！」(V、一一二二頁)と思ひ至り、グリーンは告白することを断念するのである。

愛を秘密と沈黙のなかで生きることが、結局のところ、苦しむことでしかない。グリーンは一九二一年の秋、大学の三回生になったとき、三年の学年で大学を去ることを決意する。大学を卒業するためには、一九二三年七月まで在籍しなければならぬ。だがグリーンはフランスへの帰国を一年早めることにする。大学を中退する表向きの理由は、卒業に必要な数学の単位を取ることができないという点にあった。しかし真の理由は、『遙かな土地』のなかで、「私は苦しむことにもううんざりとしていた。(…)私はもはや不可能な愛の犠牲者でありたくなかった」(V、一一二三頁)と説明されているように、「不可能な愛」の苦しみ、不毛な愛の情熱の苦悩からのがれたためであった。

さて、フランスへの出発を早める決心をした時点から、マークへの愛は若干の進展を見せる。グリーンは一九二一年の秋か冬に、ニックという学友にマークへの思いをぶちまける。ニックはマークに会いに行くようすすめる(「遙かな土地」V、一一三〇頁)。またグリーンはエドという学生にも、マークへの愛を告白し、エドからマークと話すようながされている

(V、一二三五―一二三六頁)。このような友人たちの励ましを奏して、グリーンは一九二二年四月のある晩、ついにマークへの接近をこころみる。グリーンはマークの部屋を「操り人形」のように、深く考えないで訪れたと、自伝のなかで語っている(V、一二三八頁)。グリーンがドアを叩くと、マークはドアを開け、ほほえみながらグリーンを部屋の中に招き入れる。このあとのことは『遙かな土地』のなかで、次のように振り返られている。

「私が何を望んでいるのか訊くかわりに(そんなことをされれば縮み上がっただろう)、マークは私を坐らせ、だしぬけに、私が誰であるか、人から聞いて知っている、私に会えてうれいと言った。大きくて、はつきりとした彼の声は、私には貴重な、南部のすべての抑揚をもっていた。そのことが許されている今、私は飽くことなく、薔薇色に近い褐色の顔を眺めていた。真つ黒な目が不思議な輝きを与えているその顔を。『ぼくも』と、ようやく言葉を口にする事ができるようになったとき、私は言った、『ずっと以前から君と会いたかったんだ』。『待つべきじゃなかったのに』と彼はほほえみを浮かべて言った」(V、一二三八頁)。

グリーンはマークにあたたかく迎え入れられている。グリーンが無口で、気詰まりな様子をしているのを見て、マークはギターをひきながら歌をうたう。この瞬間を思い起こして、「このひとときは過ぎ去った歲月の悲しさのすべてを消し去っていた」(V、一二三八頁)とグリーンは断じている。またグリーンはマークと一緒にいるとき、彼を抱きたい欲求をいだている。

「さらにもう一度、彼を腕の中に抱きしめたいという、突然の欲求が私をとらえた。しかしながら、彼の全身には、何かとても官能的なものと同様に、あまりにも清純な、そしてあまりにも汚れないと言う必要がある何か、が潜んでいたのだ、その行為は私には不可能なもののように思われた」(V、一二三八―一二三九頁)。

このようにグリーンはマークを「腕の中に抱きしめたいという突然の欲求」にかられている。しかしマークの全身に潜む清純さ、汚れのなさを感じ取って、この欲求をなだめる。マークと別れてから、グリーンはアーケード街を走り、田舎に通

じる道に達する。このときの心の動きとそのあとのふるまいは、自伝のなかで、次のように叙述されている。

「私は家に帰りたくなかった。自分の奇妙な幸福とだけいっしょにいたかった。そしてそこ〔田舎に通じる道〕から遠くないところにあつた森のなかで、私は一本の若木に腕をまわし、樹皮の上に頬を押しあてた」(Ⅴ、一三三九頁)。

グリーンは「一本の若木に腕をまわし」、頬を「樹皮の上に」くつつけている。「若木」はことわるまでもなくマークの代替物であり、グリーンの動作は抱擁のかわりをしている。グリーンはマークのそばにいたときから、抱擁の欲求にとりつかれており、彼の肉体的な欲望の揺れ動きを認めることができる。けれどもここで重要なことは、グリーンが欲望をいだきながらも、マークの前では、そのような気配をおくびにも出さなかつたという点である。マークに接近した日のことを顧みて、グリーンは、「マークのままなごしの純粹さが私を純粹にした。私は肉体的なあやまちをおかすことなく、自分と同性の人間を愛していたのだ」(Ⅴ、一三三九頁)と締めくくっている。マークの純粹さゆえに、マークとの愛が純粹でありえたことが追認されている。すでも述べたように、マークへの愛は純粹であると同時に、官能的なものであつたのである。

こののち、すなわち、一九二二年の四月以降、マークとの交遊ががはじまる。とはいえ、グリーンはマークへの愛を隠し、あくまで単なる友だちとしてふるまつた。グリーンがマークとの関係を友情の範囲内におさめようとしたことは、マークからレスリングをしよう誘われて、それを拒否するという挿話を読むことによつて了解できる。グリーンは『遙かな土地』において、こう追想している。

「ある晩、マークと二人きりでいたとき、彼は体育館に一緒に行つて、自分とレスリングをやつてみないかと、不意に言った。『ぼくはレスリングはできないよ』と私は言った。『ああ、ぼくが教えてやるよ。地下におりよう。この時刻には誰もいない。ぼくらは服を脱いで、どうしたらよいのか、ぼくが見せてやるよ』。私は拒んだ、と書かねばならないのはなんと奇妙なことだろう！ 私はきわめて単純な理由で拒んだのだ。彼が腕の中に私を抱きかかえたとき、彼はすべてを理解するだろうし、そうなればおしまいだからだ。彼は私をはねつけ、私が彼と会うことはもはやなくなるだろう

う（V、一二四三頁）。

グリーンはレスリングをすることによって、自分の内心の愛の感情が気づかれ、その結果、マークの友情をうしなうことを恐れて、マークの誘いをことわっている。グリーンは自己の愛が理解されないもの、受け入れられないものとみなすがゆえに、マークに胸中を明かすことはなかった。だがマークを愛しながらも、『*Je t'aime*』と言えず、単なる友人としてふるまうことは、グリーンにとって、マークと交友関係をもたないことと同様に、否、それ以上に、つらいことであつたかもしれない。そこでグリーンは予定どおり、一九二二年七月に大学を中退し、帰国の途につくのである。

グリーンがフランスにもどつてからも、マークとの交際は文通というかたちでつづいた。そして帰仏してから一年後の一九二三年の七月、マークがパリにやつてくる。マークはエルマーという友だちといっしょに旅をしており、グリーンは三人でノルマンディーに出かけたこともあつた。ある日、マークとセーヌ河畔を散歩中、グリーンは突然、マークに愛を告白することを決心する。このときのことは、もちろん自伝『遙かな土地』で取り上げられている。しかし一九五〇年十月四日付の『日記』のなかでも振り返られている。『日記』の記述のほうがりアリティーをもっているように思われるので、『日記』から引用することにしよう。

「一九二三年のある朝、私たちはセーヌ河に沿つて散歩していた。私は、『ボン＝ロワイヤル』を渡るまでに、心に思っていることを彼に言おう』と自分に言い聞かせていた。私は突然はげしく興奮して、彼の腕をつかむ。『君に言いたいことがある。とても大事なことなんだ』と私は彼に言う。彼はしばしば私の真面目くさつた態度を笑つていたものだ。『わかつた、じゃあ話せよ。聞こう』。私たちは橋に着く。私は今にも転びそうな気がする。もし話せば、マークの友情を即座に、しかも永久にうしなうことが、私にははつきりとわかる。『よく考えたが、言つてはいけな』と思ふんだ』と、私は彼に言う。それは私の青春時代の中でも、つとも苦しい瞬間のひとつであつた』。

このように、グリーンは愛の告白を決意し、告白をくわだてるけれども、マークの友情を大事にする気持ちがはたらいて、

告白を断念している。さいごから二番目の、「よく考えたが、言つてはいけないと思ふんだ」(J'ai réfléchi, je ne dois pas.) という文からは、自分の愛が同性愛であるがゆえに、その愛を隠さなければならぬのだ、愛を告白してはならないのだという思いが、はつきりと読みとれる。ところで、自伝『遙かな土地』では、この部分、「残念だが、言えないよ (Je regrette, je ne peux pas.)」(V、一二五七頁)となつている。「言つてはいけない」(Je ne dois pas.)と、「言えない」(Je ne peux pas.)とは、どのような語感の違いがあるのだろうか。管見によれば、「言えない」よりも、「言つてはいけない」のほうが、同性愛の性向をもつことでの苦しみが強く反映しているように思われる。たしかに、「言えない」という言葉も、告白することができない苦しみを表わしている。しかし「言つてはいけない」のほうが、告白を禁じられ、沈黙を宿命づけられた同性愛者の苦悩をより鮮明に表現しているとうけとれる。

また、自伝『遙かな土地』では、「残念だが、言えないよ」につづく文は、「彼は私の腕を軽くつかんで言った、《とてもよくわかるよ》と」(V、一二五七頁)となつている。自伝では、一九五〇年の『日記』でのように、「それは私の青春時代の中でもっとも苦しい瞬間のひとつであった」と言うかわりに、マークの対応が語られ、「とてもよくわかるよ」(Je comprends très bien.)といったように、マークが沈黙の意味を、グリーンの内心の気持ちを理解していたかのように回顧されている。自伝『遙かな土地』は一九六六年に刊行されたので、回想の時期が『日記』よりも十年以上遅い。時間的なへだたりがあるがゆえに、マークの反応に言及する心理的余裕ができたのだと推定される。これにたいして、一九五〇年の時点においては、まだそのようなゆとりはなく、出来事をもっぱら苦しみの体験として想起されている。

一九三三年七月の事件は、一九三〇年に発表された『もうひとつの眠り』でも問題にされている。この自伝的な小説において、語り手兼主人公のドゥニは従兄クロードに愛の情熱をいただき、作品の終わり近くで、愛の告白を決意する。二人で森の中を散歩しはじめたとき、「彼に言おう。そうしなければならぬ」(I、八七三頁)とドゥニは自分に言い聞かせる。けれども、「もし話せば、もし胸の内を打ち明けければ、彼は何と云うだろう？ 就中、どう思うだろう？」(I、八七四頁)と

自問し、「もう駄目だ、話すまい」(一、八七四頁) と思い直しているように、ドゥニは相手の理解を得られないと悟って、告白を断念する。このあと、「しかし私は、この瞬間の重味を死ぬまで重荷のように背負いつづけるだろうことがわかつていた」(一、八七四頁) との所感がつづく。この場面は、状況はことなるにせよ、一九二三年の出来事を踏まえ、そのときの心境を開示している。ジャック・プチは、『日記』や自伝の記述と比較しながら、「この瞬間の重味を死ぬまで重荷のように背負いつづけるだろう」という印象が、一九二三年の時点から近いがゆえに、「もつとも真実の」ものだ¹³と推断している。マークへの愛の告白に挫折した瞬間は、グリーンの「青春時代の中でもつとも苦しい瞬間のひとつであった」ばかりではなく、彼の人生において、「死ぬまで重荷のように背負いつづけ」なければならぬほどの「重味」をもった、決定的な瞬間であったのである。

一九二三年七月の事件がグリーン¹⁴の人生において非常な重大さをもつのは、自己と〈他者〉とのあいだには、埋めようもない距離が介在することを、彼が絶望のなかで確認したからであろう。グリーンはマークとの愛の出会いをおして、〈他者〉の存在を決定的に知った。〈他者〉とは交流をもつべき相手であり、孤独からの解放者となるべき存在である。しかしその〈他者〉に自己の内心の思いを伝えられないことで、グリーンが痛切な断絶感・孤立感をいだいたことは容易に想像される。グリーンは一九五九年の『日記』のなかで、「隣人、遙かな人と呼んだほうがいつそうふさわしいこの見知らぬ人¹⁵」と言っている。このような見方は、マークへの愛の挫折の体験に裏打ちされているだろう。また一九四一年の『日記』に見いだされる、「人間は、他の人びとから、ほとんどけつして打ち倒すことのできない柵によって切り離されている。これが私たち一人ひとりのドラマなのだ¹⁶」という人間観のうちにも、マークとの出会いと別れの体験の影響を看取することができる。ともかく、マークへの愛の告白に失敗することで、グリーンは〈他者〉との限りないへだたりを痛感し、逃れようのない孤独の世界に投げ込まれる。この孤独のなかで、グリーンはますます深刻な肉体的苦悩にさいなまれることになる。マークへの愛の経緯をたどった。マークとの愛は一九二三年の告白の失敗によって、一応の終止符を打つ。その後、マー

クとの交際はどのようになったのであろうか。自伝『遙かな土地』には、二年後の一九二五年、マークがインド諸国に旅行した折に、グリーンのもとに立ち寄ったことが報告されている。それから、一九四〇年七月、ヴィシー政府の誕生によってグリーンがアメリカに亡命したとき、マークは新聞でそのことを知り、ニューヨークに彼を出迎えにきている。このとき、マークは結婚しており、扶養すべき子どもたちがいて、生活は豊かではなかった。とはいえ、金に困っているグリーンに百ドル紙幣を手渡そうとしている。また一九五二年七月十九日付の『日記』には、妻と二人の娘を連れてパリにやってきたマークに、グリーンが会ったことが書き記されている。このように一九二三年以降も、グリーンはマークとの付き合いをつづけている。けれどもグリーンは友人としての交わりに限定し、内心に秘めた思いを打ち明けることはなかった。マークへの愛は徹頭徹尾、不可能な・告白されない愛であり、秘密と沈黙のなかで生きられたのである。

八 おわりに——作家の誕生——

ヴァージニア大学留学時代の当初のグリーンは孤立もしくは孤独、次に肉体的苦悩を瞥見したあと、マークとの出会いを検討し、グリーンにおける愛と欲望の分離と、彼の同性愛者としての苦しみとについて論じた。それからマークへの愛の顛末を明確にした。グリーンはアメリカでの留学時代を総括して、『遙かな土地』で、「アメリカ、それはマークだった」(Ⅴ、一二五頁)と断言し、自伝第四卷『青春』(一九七四)のなかで、マークのことを、「たとえ私を苦しめることしかできないとしても、この世で生命(いのち)よりも貴重であった唯一の存在」(Ⅴ、一二六頁)と規定している。グリーンにとって、留学時代はマークへの愛の体験に収斂する。一九三三年七月、愛の告白を諦めることで、マークとの愛は挫折に終わる。この愛の挫折の体験から、作家グリーンが誕生したことは言うまでもない。ジャン・ピエール・J・ピリウは、「彼〔グリーン〕がマークに話せない」と結論したまさしくその場所で、自分は作家にかなりえないという決定的な確認が生じるのである」⁽¹⁶⁾

と論定している。したがって、マークへの愛の体験はグリーンの文学に色濃く反映することになる。

ここで、グリーン作品への、マークへの愛の体験の影響の具体的あらわれを見ておくことにしたい。まず第一に、すでに触れたように、グリーン作品では、しばしば宿命的な愛の出会いが描かれている。これはマークとの出会いの体験に根ざしている。この点にかなして、ジャック・プチは『ジュリアン・グリーン』、『他所からやってきた人』と題した研究書のなかで、次のように述べている。

「他所からやってきた人間、見知らぬ人が突然、出現するということだけで、それまで平穏だった世界をひっくり返し、眠っていた情熱——愛であれ、憎しみであれ——を目覚めさせ、ドラマに導く。こうした構成タイプは、ジュリアン・グリーンの大抵の小説において見いだされる」。

ジャック・プチによれば、グリーン小説において、「他所からやってきた人間」の不意の出現によって、人物たちの情熱が目覚め、人物たちは「ドラマ」に導かれる。つまりグリーン作品は、〈他者〉との出会いを出发点として構成されている。ここで言う〈他者〉とは、それが出現することによって、自己の存在をおびやかす、くつがえしてしまうような者のことであり、必ずしも愛の対象としての存在に限定されるわけではない。『ヴァルナー』(一九四〇)では、〈他者〉とは、輪廻転生のシンボルである鎖であり、『私があなたなら』(一九四七、新版一九七〇)では、悪魔ないし悪魔的存在としてのブリットマルである。ともかく、ジャック・プチは、グリーン作品のはじめに、〈他者〉との出会いの場面が置かれているという事実に着目しつつ、『クリステイヌ』から『人みな夜にあつて』(一九六〇)に至るまでの作品を一つひとつ分析し、そのうえで、グリーン全作品が、マークとの出会いという「同一の出来事のためまない繰返し」であると結論している。たしかに、グリーン作品が終始、〈他者〉との出会いを問題にしていることはきわめて重要であり、この事実がマークとの出会いという根源的な体験に由来することは間違いない。

グリーン作品において、不可能な愛が執拗に描かれていることも、マークへの愛の体験の影響のあらわれである。愛の

不可能性はまず、愛の実現を妨げるような外的な障碍が存在することによって生じている。『クリスティーナ』において、ジャンが愛する相手は聾啞者であり、知恵遅れの少女であるので、ジャンの愛は理解されず、不可能なものとしてとどまる。『モンシシネール』（一九二六）のエミリーが心をひかれるセジウィックは牧師である。『人みな夜にあつて』で、ウィルフレッドが愛するフィービーは人妻である。『漂流物』（一九三二）のなかで、エリアーナは義理の弟フィリップに思いを寄せている。『ヴァルーナ』第二部のマルグリットが憧憬の念をいだくベルトラン・ロンバルは、義理の兄である。『幻を追う人』（一九三四）においては、プラス夫人の、甥マニュエルにたいする執着が描かれている。また『ヴァルーナ』第二部の、ベルトラン・ロンバルのエレーヌへの感情、劇作『影』（一九五八）での、フィリップ・アンダースンのリュシルへの愛着とおして、父親の妻の娘にたいする近親相姦的な愛が暗に表現されている。グリーン作品のなかでは、作者じしんの性向を反映して、もちろん同性愛も物語られている。『もうひとつの眠り』のドゥニの、従兄クロードへの愛、『モイラ』におけるサイモン、プレローのジョゼフへの愛、劇作『南部』のイアンのエリックへの愛、『悪人』のジャンのガストンへの愛、『人みな夜にあつて』のなかのアンガス、マックスのウィルフレッドへの愛がそれである。愛の対象が牧師、人妻、義理の兄弟、甥、実の娘、同性の人間であるということは、社会的・道徳的な次元から見てもともと愛の成就を困難に、というより不可能にする障碍があるということの意味する。これらの愛ははじめから挫折を運命づけられている。それゆえ、今挙げた人物たちは、『クリスティーナ』のジャンと、『人みな夜にあつて』のウィルフレッドを除けば、愛を告白しない。胸臆を吐露することによってひき起こされるであろう結果を考慮して、彼らは沈黙をまもる。自らの情熱が報いのないものであることを知るがゆえに、愛を秘密として生きる。グリーン的人物たちの愛は不可能であると同時に、大抵の場合、告白されない愛でもある。

グリーン作品のなかで、愛の不可能性は告白の不可能性と表裏をなす。この告白の不可能性は、作中人物たちが執筆する手紙を少し調査することによって浮き彫りにされる。¹⁹すなわちグリーン的人物たちは、愛する相手にしばしば自分の思い

を打ち明けた手紙を書く。しかしそれらの手紙は多くの場合、發送（投函）されない。たとえば、『モンシネール』のエミリーは、知らず知らずのうちに心をひかれるセジウィックに、發送しない手紙をしたためている。『悪人』のなかで、ガストンに恋するエドウィージュも投函しない手紙を書いている。『他者』（一九七二）において、ロジエを愛するカーリンも、二度、肺肝を開いた手紙を作成するが、發送しない。『ヴァルナ』第二部で、マルグリットはひそかに愛する義理の兄、ベルトラン・ロンバールへの熱烈な思いをぶちまけた詩あるいは手紙を作り、それを食べている。『南部』では、エリックを愛するアンジェリーナが、幾度も手紙を書き、ひき裂いている。『漂流物』において、義理の弟フィリップを愛するエリーヌは、「彼女は心の中でフィリップに愛の手紙を書いた」（Ⅱ、七七頁）と語られているように、想像上の手紙を作成している。夢見られた手紙と言いかえることもできるこの手紙は、先の食べられた手紙、ひき裂かれた手紙と同様に、發送（投函）されない手紙のなかに含めることができる。ところで、手紙は發送（投函）されないとき、名宛人とコミュニケーションを達成するという本来の目的・使命を果たさない。作中人物たちは愛する相手に自らの気持ちを理解してほしいという願いにかられて、手紙をしたためる。けれども、その手紙を發送（投函）しないことで、彼らの愛は秘密に、孤独な愛にとどまる。ここから、告白の不可能性が認められる。

もつとも、グリーンンの作品において、手紙が發送される場合も見られる。『アドリエヌ・ムジュラ』のなかで、モルクル医師を愛するアドリエヌは旅先から、「私はあなたを愛しています（Je vous aime）」（Ⅰ、四三三頁）と書いた絵葉書を封筒に入れて投函する。アドリエヌは全面的に自分の思いを打ち明けた手紙を送る。だが彼女は、この手紙に自分の名前を書かない。手紙の受け取り人であるモルクルは、誰かが自分を愛していることは知りえても、その誰かを特定することはできない。匿名の手紙もまた、發送（投函）されない手紙と同じく、コミュニケーションの達成という本来の目的を放棄しており、告白の不可能性を露呈している。また、『漂流物』のエリーヌは、不可能な愛の苦悩に耐えかねて家出をし、下宿先から、愛する義理の弟フィリップに宛てて手紙を書き送っている。しかし実際に読まれるつもりで執筆されたこの手

紙は、『Je t'aime』と言わない不完全な内容のものである。この手紙からも、告白の不可能性がうかがえる。グリーンの商品のなかで、愛の告白を完全におこない、コミュニケーションの達成という目的を果たした手紙は、例外的に『人みな夜にあつて』で見られるにすぎない。フィービーがウィルフレッドに宛てて作成した手紙がそれである。とはいえ、この小説において、告白のためらいを示す手紙が存在する。アンガスは愛するウィルフレッドに不完全な内容の手紙しか発送できない。フィービーを愛するウィルフレッドは愛の手紙をしたためるけれども、「穏やかな」(Ⅲ、六二四頁)内容の手紙を合わせて書き、二通の手紙のうち、どちらが愛の手紙であるのかわからないようにして、一通だけを投函する。ここに見られるのは告白のためらいであり、このためらいは告白の不可能性につうじるものといえよう。このように、グリーンの商品における手紙は、発送(投函)されない手紙であったり、署名されない手紙であったり、不完全な内容の手紙であったりするので、告白の不可能性、愛の不可能性と深く関係している。

グリーンの商品における不可能な・告白されない愛の主題を際立たせるものとして、誤解のテーマがある。グリーンの商品では、愛は多くの場合、一方的なものにとどまる。だが時として相互的なかたちをとることもある。けれども、その場合でも、愛の対象とのあいだにしかるべき交流がなされないために、愛する人物たちは、自分が愛されていることを知らないか、自分が愛されていないと思ひこんでいる。要するに、愛する相手の気持ちを誤解している。この誤解が悲劇的な結末をひき起こしている作品も見られる。『レイヴィアタン』(一九二九)がそうである。この小説では、ゲレとアンジェールの愛が描かれている。ゲレが愛するようになったアンジェールは、洗濯屋につとめている。と同時に、おばのロンド夫人が経営する食堂の客たちを相手に売春婦まがいのことをしている。好奇心に支配されたロンド夫人は客たちの私生活の細部を知るため、アンジェールの肉体を利用するのだ。アンジェールとはじめて出会ったとき、ゲレはこの秘密を知らず、愛の情熱をいだいて苦しむ。一方、アンジェールのほうは、ゲレと出会うことよって、新たな生の可能性を模索するようになる。ゲレは、これまで相手にしてきた食堂の客たちとはちがって、自己を孤独から解放してくれるような存在であり、ついに愛の

対象となる。しかしながら、ゲレはアンジェールの心境の変化を知らない。ロンド夫人の食堂の客からアンジェールの秘密を聞き知って、今までのアンジェールのぎこちない態度を愛の拒否とうけとり、自分が愛されていないと決めこんで逆上し、アンジェールの顔面を怒りの中で木の枝で鞭打ち、顔が血で見えなくなるほどまでに、彼女を責めさいなむ。このサディズム的行為は、ゲレがアンジェールの内心を誤解していることに起因する。アンジェールがゲレに『*Je t'aime*』と告白し、胸襟を開いておれば、この誤解はとけたであろう。けれどもアンジェールが愛の告白をしないために、誤解がそのままのこり、悲劇的な結果を招いたのである。

『モイラ』もまた、一面において、誤解のもたらした悲劇と読める。この小説では、ジョゼフとモイラというカップルが登場する。ジョゼフは、プロテスタントの熱狂的な信仰をもつ学生である。だがモイラと出会ったときから、彼女の官能性に心を惑わされ、欲望に苦しむ。モイラは男たちを相手に放縱な生活をつづける蓮つ葉な娘である。モイラは、学生たちのはじめは戯れのつもりでジョゼフに近づいたのであるが、彼の部屋で二人きりになったとき、いままでに接した男たちとはちがった面を目的あたりにして、彼を愛するようになる。ジョゼフへの愛を自覚したモイラは、彼を誘惑することをやめ、部屋から出て行こうとする。しかしジョゼフはモイラの内心の変化を知らない。結局、ジョゼフは欲望に負け、モイラと肉体の交わりを結んでしまう。眠りからさめ、正気にもどったジョゼフは、ベッドで幸せそうに眠るモイラを、誘惑に屈したことへの怒りと絶望から絞め殺してしまふ。ジョゼフは、モイラに自分を誘惑する気がなくなったこと、また、彼女が自分を愛していたことを知らない。自分を物笑いの種にするため、自分を誘惑しようとしつづけたと思いこんでいる。この誤解が殺害行為を生んだと解しうる。もしモイラがジョゼフに愛を告白しておれば、このような事態は避けられたかもしれない。『レヴィアタン』と同様、『モイラ』においても、誤解が悲劇的な結末を惹起している。そしてここから、告白の不可能性、愛の不可能性が浮かび上がってくる。

グリーン作品のなかの愛が不可能な・告白されない愛であることは、遅すぎた告白とか、失敗した告白の場面が挿入されているという事実からも明白である。遅すぎた告白の例としては、『アドリエヌ・ムジュラ』の女主人公の告白を挙げることができる。アドリエヌ又は作品の終わり近くで、愛するモルクールについて自分の気持ちを打ち明ける。けれども彼女の告白は、父親を殺し、孤独が極限状態にまで達したあとであり、発狂の寸前である。モルクール医師はアドリエヌの愛を拒絶する。だが、だからといって、事態が変化するわけではない。アドリエヌは医師にたいする愛の感情をどうすることもできない。それは、告白が遅すぎるからである。医師にもっと早く告白しておれば、少なくともアドリエヌは発狂しないですんだかもしれない。遅すぎた告白は、それまでの告白の不可能性をひき立たせている。

失敗した告白の場面は、『もうひとつの眠り』や『南部』などに見られる。『もうひとつの眠り』で、ドゥニが従兄クロードに愛の告白をしようとするが断念することはすでに述べた。『南部』では、エリックとの瞬間的な出会いによって、はげしい情熱にとりつかれたイアンが、エリックに愛の告白をくわだてている。しかしイアンは、自分が愛していることを教えることができても、愛する相手がエリックであると言えない。《*Je vous aime*》と告白することができない。告白に挫折したイアンは、エリックを徹底的に侮辱し、決闘にかりたて、そして決闘に際しては、わざと相手の剣に胸を刺されて死んでいく。失敗した告白は、遅すぎた告白と同じく、告白の不可能性、愛の不可能性を浮き彫りにしている。

また、グリーン作品では、*confident* (㉔) が存在する⁽¹⁾とも、注目に値する。*confident* (㉔) とは打ち明け話の聞き手という意味である。作中人物たちは誰か第三者に、自分の愛の秘密を洩らすことがある。たとえば、『アドリエヌ・ムジュラ』のヒロインは、ルグラ夫人という、のちに自分から金をまき上げる人物に、医師にたいする思いを打ち明けている。『南部』のなかで、イアンは少年ジミーに、自己の愛の感情を披瀝しようとしている。『悪人』では、ジャンが、自分と同じくガストンを愛しているエドウィージュに、同性愛者としての苦悩を吐露しようとしている。しかしながら、これらの人物たちは打ち明け話をすることによって、自己の孤独な状況を打開しようとしているわけではない。ただ、愛を秘密として生きるこ

との苦しみに耐えかねて、話をしているにすぎない。したがって、『南部』のイアン、『悪人』のジャンがそうであるように、confident(㉔)が話を理解することを、人物たちが望んでいない場合さえある。状況の打開、事態の改善を目指さない打ち明け話は、結局は空しいし、逆に秘密の重味をいやまし、孤独を深化させるだけである。confident(㉔)の存在もまた、愛の可能性、告白の可能性と深くかかわっている。

障壁、手紙、誤解、遅すぎた告白・失敗した告白、そしてconfident(㉔)の存在を分析することをおして、グリーン作品における愛が不可能な愛であり、基本的に告白されない愛であることを見てきた²⁰。この事実は、はじめに述べたように、マークへの愛の体験の影響のあらわれだと論断できる。アントニオ・モールは、「グリーン²¹の大学時代は、この『不可能な愛』(「マークへの愛」)によって支配されている。このテーマは、『アドリエヌヌ・ムジュラ』から『人みな夜にあつて』に至るまでの彼の大半の作品の主題を提供するだろう」と推察している。アントニオ・モールは、大学時代のマークへの愛の体験がグリーンに、『不可能な愛』という文学主題を提供したと理解している。またグリーンは一九七〇年の『日記』のなかで、マークへの愛を追憶しつつ、こう書いている。

「最初の愛、それがもし満たされないものであるならば、永遠に心を痛めつけるものなのだ。何ものもけっして傷を閉じることなく、半世紀が私の最初の愛の上を通りすぎていった。そして私はこの傷口から (por la boca de su herida) 全作品の中で絶望のうたを歌った」²²。

グリーンが自分の全作品を、マークへの愛の体験がもたらした心の「傷口」から歌われた「絶望のうた」だとみなしている。グリーンはマークへの愛の挫折によって、自己と「他者」とのあいだには限りないへだたりがあること、他者≠隣人が「遙かな人」であることを認識した。この認識が「傷口」となって、グリーンはその「傷口」から「絶望のうた」を歌うことを余儀なくされた。不可能な愛あるいは告白されない愛という文学主題はその「絶望のうた」の端的なあらわれである。

しかしながら、マークへの愛の体験の決定的意義は、それが不可能な・告白されない愛という文学主題を与えたという点

にあるとともに、すでも指摘したように、グリーンが恒常的に〈他者〉との出会いを問題にしなければならなかったという点にも存する。第一期（初期）、すなわち一九二〇年代の作品群では、他者 \parallel 愛を追いもとめることの苦しさ、ないしは追いもとめないではいられないことの苦しさが叙述されている。第二期（中期）の、『もうひとつの眠り』から『私があなたなら』までの小説では、他者 \parallel 愛を希求することの苦しさ、空しさの自覚の上に立って、夢想、幻想、非現実の世界への脱出がこころみられている。第三期（後期）、一九五〇年の『モイラ』からの作品群では、〈他者〉との出会いが宗教とのかかわりで描かれ、愛が信仰とどのように関係するのかが問われている。第四期（晩年）の三部作『遙かな国々』（一九八七、改訂版一九九四）、『南部の星』（一九八九、改訂版一九九四）、『ディクシー』（一九九五、改訂版一九九八）では、他者 \parallel 愛に積極的に身をゆだねる女主人公エリザベスをとおして、他者 \parallel 愛を探索することの幸福が描出されている。このように、時代によって変遷するものの、グリーンは〈他者〉との出会いを中心にすえ、〈他者〉の出現によって人間がいかに変貌するか、を語りつづけてきた。この事實は、マークとの出会いの体験のもたらした最大の影響であると思われる。

少し長くなったが、グリーンは一九二二年七月にフランスに帰国し、一九二四年、『クリステイヌ、または海辺の休暇』^②いるかを考察した。グリーンは一九二二年七月にフランスに帰国し、一九二四年、『クリステイヌ、または海辺の休暇』や『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』などを発表することによって、文学的出発をする。帰仏から文学的出発をするまでの時期は、自伝第四卷『青春』で回想されている。この『青春』を主な検討材料としつつ、この時期のグリーンの人生がいかなるものであったかを明らかにすることを、次の課題としたい。

註

- (1) この論考は三篇から成り、(一)は山口大学「独仏文学」第二十二号(二〇〇一年二月)に、(二)は同「文学会志」第五十一卷(二〇〇一年二月)に、(三)は同「独仏文学」第二十三号(二〇〇一年十二月)に発表。
- (2) 山口大学「独仏文学」第二十五号(二〇〇三年十二月)に発表。
- (3) 拙稿「ジュリアン・グリーンの出発(三)」、山口大学「独仏文学」第二十三号、二〇〇一年十二月、五九頁を参照。
- (4) ヘンは大文字で書かれていることを示す。
- (5) グリーンは、ブレイアード版には収録されなかった、一九三九年の日付のない『日記』のなかで、次のように書き記している。「子ども時代から、いくら英語を学び、以来英語を話すことをけつしてやめなかったとしても無駄であった。私は自分のために作られたのではない衣服を身につけようとしているのだと自分に言い聞かせることなしに、この言語で書くことはできない。(…)私の部屋着、毎日の衣裳、幸福で自由であると感ずる衣裳はフランス語である」(*Journal 1928-1958*, Plon, 1961, p.321)。
- (6) 拙稿「ジュリアン・グリーンの出発(三)」五八一―六〇頁を参照。
- (7) 拙稿「ジュリアン・グリーン of 思春期」、山口大学「独仏文学」第二十五号、二〇〇三年十二月、四七一―五〇頁を参照。
- (8) 強調は引用者。以下同様。
- (9) この青年のことについては、拙稿「ジュリアン・グリーン of 思春期」、五五―五八頁で論及した。
- (10) 訳文は、日本聖書協会のものである。一九七二年版「聖書」参照。
- (11) Jean Sémollet, *Julien Green ou l'obsession du mal*, Editions du Centurion, 1964, p.93.
- (12) 『内なる鏡』、『日記』第六卷、一九五〇年十月四日、IV、一一八一頁。
- (13) Jacques Petit, «Notes» pour *L'Autre Sommeil*, *Œuvres complètes de Julien Green*, t.I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972, p.1226.
- (14) 『見えないものに向かつて』、『日記』第八卷、一九五九年六月九日、V、一九〇頁。

- (15) 『暗い扉の前で』、『日記』第三巻、一九四一年六月二十五日、IV、五八九頁。
- (16) Jean-Pierre J. Piriou: *Sexualité, religion et art chez Julien Green*, Nizet, 1976, p.66.
- (17) Jacques Petit: *Julien Green, «l'homme qui venait d'ailleurs»*, Desclée de Brouwer, 1969, p.35.
- (18) 同右、三三五頁。
- (19) 私は以前、「ジュリアン・グリーン」の作品における手紙について (一) (二) (三) (山口大学「文学会志」第四十三巻、一九九二。同「独仏文学」第十五号・第十六号、一九九三・一九九四) という論考を作成し、グリーン」の作品に見られる手紙について、詳しく論じたことがあった。詳細はこの論考を参照。
- (20) 『敵』(一九五四)、「人みな夜にあつて」、「他者」といった第三期(後期)の作品では、愛は不可能であるとしても、告白され、一定程度の交流を見せる。第四期(晩年)の三部作の小説では、愛は結婚に至るので、不可能性の域を脱している。
- (21) Antonio Mor: *Julien Green, témoin de l'invisible*, Traduit de l'italien par Héléne Pasquier, Plon, 1970, p.44.
- (22) 『残された日々』、『日記』第九巻、一九七〇年一月六日、V、五四五頁。
- (23) 一九二四年当時、グリーンはこのタイトルで雑誌『ヴィータ』に発表したのが、のちに『クリステイヌ』と改題する。